

令和元年6月18日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16587

研究課題名(和文) 米国における福祉権運動の展開 - 人種、階級、ジェンダーの交錯

研究課題名(英文) Race, Class, and Gender in America's Welfare Rights Movement

研究代表者

土屋 和代 (Tsuchiya, Kazuyo)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：60555621

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：1960年代に米国で展開した「福祉権運動」とはいかなる運動であったのか。黒人解放運動や女性解放運動とどのように交錯し、影響を受け/与えながら、同時代に展開したのか。本研究では、アメリカにおける「福祉権運動」について、その中心となった全米福祉権団体(NWRO)の活動に焦点をあて研究を行った。貧窮状態にあるシングルマザーとその子どもたちへの公的扶助プログラムである、要扶養児童家族手当(AFDC)の受給者を束ねた組織である全米福祉権団体が、どのように「福祉」を「慈善」ではなく「権利」として書き換え、またそのことによってアメリカの福祉国家の性格を変容させることとなったのかを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

NWROを中心とする福祉権運動は、一九六〇年代のアメリカにおいて「最も重要な社会運動の一つ」にもかかわらず、他の社会運動に比べ今日に至るまで十分に研究されてこなかった。本研究は、福祉権運動が起こった背景、その特徴、射程、運動の意義と限界を明らかにし、そこから「六〇年代」のアメリカ社会を逆照射した。

本研究は、社会保障をめぐって揺れ動く今日の米国社会を理解する上でも意義深い。受給者がいかに「労働」、「市民権」の内実を問い直したのか、彼女/彼らが打ち立てた「福祉権」とは何を意味したのかは、社会保障の解体が進む今日こそ、問われるべきである。

研究成果の概要(英文)： My project explored the powerful alternative visions asserted by the National Welfare Rights Organization, an association representing the recipients of Aid to Families with Dependent Children (AFDC). Organization individuals radically questioned the foundations on which U.S. welfare policies had been built, and the concept of "welfare rights" became the centerpiece of their struggle.

I examined the following five questions: (1) In what way did the black freedom struggle and the War on Poverty become a seedbed for the NWRO? (2) Why did the NWRO oppose coerced sterilization? (3) How did the NWRO demand the right to feed, clothe, and house their children, thereby insisting on their right to live? (4) In what way did the NWRO fight for their vision of a guaranteed adequate income? (5) How did antiwelfare sentiment lead to cutbacks in the AFDC, shrinking membership, and eventually internal divisions within the NWRO?

研究分野：アメリカ史

キーワード：アメリカ合衆国 社会運動 福祉 人種 貧困 ジェンダー 歴史学 1960年代

1. 研究開始当初の背景

1960年代に米国で展開した「福祉権運動」とはいかなる運動であったのか。黒人解放運動や女性解放運動とどのように交錯し、影響を受け／与えながら、同時代に展開したのか。本研究では、アメリカにおける「福祉権運動」について、その中心となった全米福祉権団体（NWRO）の活動に焦点をあて研究を行った。貧窮状態にあるシングルマザーとその子どもたちへの公的扶助プログラムである、要扶養児童家族手当（AFDC）の受給者を束ねた組織である全米福祉権団体が、どのように「福祉」を「慈善」ではなく「権利」として書き換え、またそのことによってアメリカの福祉国家の性格（及びリベラリズムの意味）を変容させることとなったのかを考察した。

2. 研究の目的

歴史家プレミラ・ネイダセンが指摘するように、全米福祉権団体を中心とする福祉権運動は、一九六〇年代のアメリカ政治、社会に揺さぶりをかけた「最も重要な社会運動の一つ」にもかかわらず、日本においてはもちろんのこと、米国においてさえ他の社会運動に比べ今日に至るまで十分に研究されてこなかった。本研究は、ハーワード大学所蔵の全米福祉権団体の文書や、ウィスコンシン・ヒストリカル・ソサイエティ所蔵のジョージ・ワイリー文書、活動家へのインタビュー、機関紙や新聞記事の分析を通じて、福祉権運動が起こった背景、その特徴、射程、運動の意義と限界を明らかにした。

新たな史実を発掘するだけではなく、本研究は1960年代の米国政治、経済、社会、文化を逆照射する意味においても重要である。福祉権運動は、リンドン・B・ジョンソン政権下で行われた貧困対策事業「貧困との戦い」を一つの契機とし、黒人解放運動の流れを汲み、かつ後年女性解放運動とも交錯した福祉受給者の運動であった。こうした重層的な性格を有する福祉権運動は、米国における「六〇年代」の社会運動の越境的性格を探る上での好例でもある。本研究では、AFDC受給者の、人種、階級、ジェンダーからなる「重層意識」に注目したい。またそこから「六〇年代」のアメリカ社会を逆照射し、研究史のなかで別個の運動として語られることの多い社会運動の越境的性格を考察したい。

さらに、本研究は、社会保障をめぐって揺れ動く今日の米国社会を理解する上でも意義深い。戦後の米国では、AFDC受給者数の増加とAFDCの性格の変化（有色人種の母親やシングルマザーの割合の増大）に伴い、メディアや政治家が「未婚で、働かない、自堕落な福祉に依存する母親」という言説を生み出してきた。受給者は家庭崩壊、労働モラルの低下、都市暴動、犯罪の増加などさまざまな「社会問題」の罪をかぶせられ、スケープゴートにされてきた。「福祉依存」の言説が力を持ち、「改革」の名のもとにAFDCの解体が進められた結果、一九六〇年代に勝ち取った権利、福祉権運動が投げかけた問いが忘れ去られ、受給者の「声」が掻き消されてきた。受給者

がいか「労働」「市民権」の内実を問い直したのか、彼女／彼らが打ち立てた「福祉権」とは何を意味したのかを、社会保障の解体が進む今日こそ、問われるべきである。

3. 研究の方法

AFDC の受給者を束ねた組織である全米福祉権団体が、いかに「福祉」を「慈善」ではなく「権利」として書き換えたのかを、ハーワード大学（ワシントン D.C.）に保管されている全米福祉権団体の文書、ウィスコンシン・ヒストリカル・ソサイエティ（ウィスコンシン州マディソン）に所蔵されているジョージ・ワイリー文書、カリフォルニア大学ロスアンジェルス校および南カリフォルニア大学図書館（ロスアンジェルス）所蔵の文献・史料、ジョージ・ワイリー・センター（ロードアイランド州ポータケット）におけるインタビュー調査をもとに検討した。以下の五点に焦点をあてた。（1）1960年代の米国において福祉受給者はどのような生活を営んでいたのか。なぜ60年代半ばに自らの権利を求めて立ち上がったのか。（2）性と生殖の権利を求めていかなる運動を起こしたのか、（3）衣食住という日々の生活の場における活動を通じて、「福祉権／生存権」の確立を目指したのか。（4）「最低所得保障（GAI）」をどのように市民権の一部に位置づけたのか。（5）ブラック・ナショナリズムとフェミニズムのあいだで、どのように自らの運動を位置づけたのか、である。

4. 研究成果

- （1）第二次大戦後のアメリカにおいて、AFDC 受給者はどのように位置づけられたのか。受給者は「福祉に依存する母親」という言説に対し、いかなる異議申し立てを行ったのか。受給者が綴った詩のなかから読み取るとともに、無力さを感じてきた個々の受給者が結束し共闘する〈場〉として誕生した全米福祉権団体設立の経緯を明らかにした。
- （2）全米福祉権団体を中心とした黒人低所得者のフェミニストが、性と生殖をめぐる権利を奪う政府をいかに告発し、公的資金援助の下秘密裏に行われてきた不妊施術を糾弾して政策に変更を迫ったのか、自らの子どもを産み／育てる権利を求め闘ったのかを考察した。
- （3）公民権運動及び同時代に展開した貧困対策事業から派生し、公民権運動が遺した課題に取り組んだ全米福祉権団体はどのように福祉を「権利」として書き換えたのか。日々の生活の場（衣食住）における活動の分析を通して、全米福祉権団体が目指した「福祉権／生存権」とはいかなるものであったのかを検討した。
- （4）1969年8月8日、リチャード・ニクソンは児童を扶養する全ての家族に年間1,600ドル（四人家族の場合）を給付する計画を発表したが、「保証所得」が60年代末のアメリカで内政の最重要課題として浮上したのか、全米福祉権団体が

なぜ家族支援計画を拒み批判したのかを明らかにした。G・ワイリーら黒人ミドルクラス男性の指導者と、J・ティルモンら福祉受給者のシングルマザーとの間に活動の優先順位をめぐっていかなるくい違いが生まれたのか、両者の齟齬は全米福祉権団体にいかなる亀裂を生じさせ、組織を解体に導く一因となったのかを考察した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 土屋和代「生存権・保証所得・ブラックフェミニズム—アメリカの福祉権運動と〈一九六八〉」『思想』1129号(2018年5月)、105-29頁。【上記研究成果(3)、(4)】
[査読なし]
- ② 土屋和代「『福祉権の聖歌』—全米福祉権団体の結成と人種、階級、ジェンダー」『立教アメリカン・スタディーズ』38号(2016年)、81-103頁。【上記研究成果(1)】
[査読なし]

[学会発表] (計 8 件)

- ① 土屋和代「『この世界はかつての姿ではない』—全米福祉権団体の解体をめぐって」
「歴史のなかの人びと」研究会、2018年11月10日、専修大学生田キャンパス。【上記研究成果(5)】
- ② 土屋和代「アメリカの福祉権運動と〈1968〉—保証所得をめぐる相克」国際シンポジウム「グローバルな記憶空間としての東アジア Ver.2 メモリーレジーム/メモリーアクティビズム」Panel 2「1968年の記憶と現代」2018年9月14日、早稲田大学。【上記研究成果(3)、(4)】
- ③ 土屋和代「誰の『正義』か—1992年ロスアンジェルス蜂起をめぐる表象の政治」
東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻主催第26回公開シンポジウム
「移民と人権」、2018年6月30日、東京大学駒場キャンパス。
- ④ 土屋和代「コメント」東京大学大学院総合文化研究科 アメリカ太平洋地域研究センター(CPAS)創設50周年記念シンポジウム「アメリカは今—歴史から政治へ」、
2017年11月12日、東京大学駒場キャンパス。
- ⑤ 土屋和代「誰のための『福祉』か—ニクソン政権下の『家族支援計画』と人種、階級、ジェンダー」(部会B「アメリカ型福祉国家再考」)アメリカ学会第51回年次大会、2017年6月4日、早稲田大学。【上記研究成果(4)】
- ⑥ 土屋和代「生存権を問う—公民権運動と福祉権運動」(小シンポジウム3 黒人女性の視点から再評価する公民権運動—人種、ジェンダー、階層、宗教による差別解

消と正義を求める運動との有機的関連)日本西洋史学会第67回大会、2017年5月21日、一橋大学。【上記研究成果(3)】

- ⑦ 土屋和代「受給者が紡ぎ出す詩—第二次大戦後のアメリカにおける〈福祉の危機〉と全米福祉権団体」という題目で講演し(2015年度アメリカ学会清水博賞受賞記念研究会、2015年10月24日、立教大学アメリカ研究所。【上記研究成果(1)】
- ⑧ 土屋和代「レルフ姉妹とマイケル・ブラウンのあいだ—ポスト公民権期アメリカの都市における身体と暴力」日本アメリカ史学会年次大会シンポジウムC「都市の人種関係史」、2015年9月27日、北海道大学。【上記研究成果(2)】

[図書](計 2 件)

- ① 土屋和代「〈廃品〉からの創造—S・ロディアのワッツ・タワーとブラック・ロスアンジェルス」熊谷謙介編『破壊のあとの都市空間—ポスト・カタストロフイヤーの記憶』青弓社、2017年、287-317頁。
- ② 土屋和代「誰の〈身体〉か?—アメリカの福祉権運動と性と生殖をめぐる政治」小松原由理編『〈68年〉の性—変容する社会と「わたし」の身体』青弓社、2016年、62-90頁。【上記研究成果(2)】

[産業財産権]

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

[その他]

- ① 土屋和代「剥き出しの人種／性差別主義、対抗のスク립ト、変わりゆく世界のなかのトランプイズム—CPAS シンポジウム『アメリカは今 歴史から政治へ』コメント」『アメリカ太平洋研究』118号(2018年)、58-63頁。
- ② Tsuchiya, Kazuyo. “Book Review: From the War on Poverty to the War on Crime: The Making of Mass Incarceration in America. By Elizabeth Hinton.” *Journal of American*

History 104, no. 2 (September, 2017), 569-570.

- ③ 土屋和代「新刊紹介 大森一輝著『アフリカ系アメリカ人という困難—解放奴隷後の黒人知識人と「人種」—』『史學雑誌』第125編6号（2016年）、121-122頁。

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者 なし

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者 なし

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。